嵐剤耐性いもち病菌対策について

今年、嵐剤に耐性のあるいもち病菌の発生が確認されました。このため来年度からは、嵐剤に頼らない防除体系で育苗期防除と本田葉いもち病防除を行う必要があります。

耕種的防除

本田におけるいもち病発病の主な原因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。また、乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻も伝染源になります。

育苗施設の近傍や施設内に伝染源となる稲わら・籾殻を置かないようにし清潔な環境で育苗管理を行いましょう。また、育苗施設内の通風不良、日照不足、被覆期間の過剰、過繁茂、田植の遅延は発病を招きますので注意が必要です。補植用余り苗はいもち病が発病しやすく、伝染源になりやすいので補植後は泥に埋めて処分しましょう。

苗立枯病予防

嵐剤はピシウム菌（ムレ苗）による苗立枯病に対して有効でした。対策として、床土に焼土や人工培土を使用しない場合はタチガレエースM剤を使用しましょう。また、過かん水などによって育苗ハウス内が蒸れることは発生を助長するので、換気などによって蒸れない温度管理を徹底しましょう。

苗いもち防除と箱処理剤で葉いもちの発生を抑えましょう

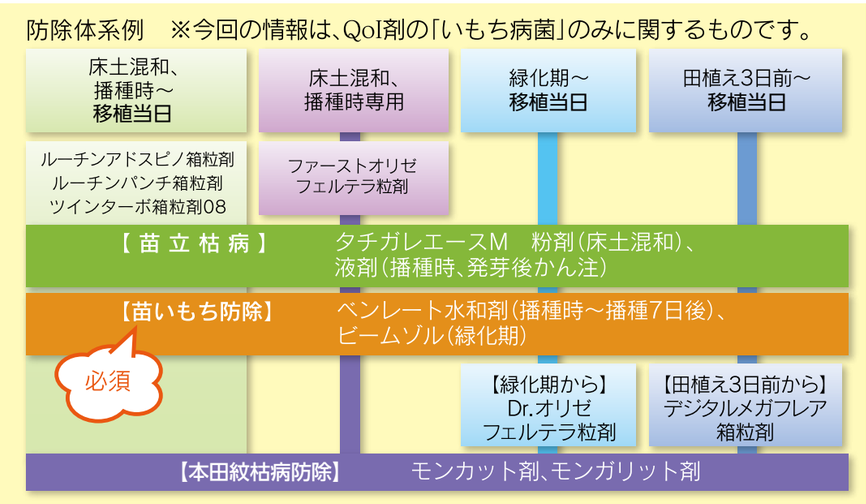
種子消毒を必ず行いましょう。防除効果を高めるために浸種水温は10℃～15℃になるように努めましょう。

箱処理剤はいもち病に対して「予防効果」しかありませんので、育苗期ではベンレート水和剤かビームゾルで必ず苗いもち防除を行いましょう。箱処理剤は使用時期が剤によって違いますので自分の作業体系にあった剤を選択しましょう。使用時期を間違えた場合は薬害を生じてしまいますので確認が必要です。

箱処理剤を使用しない場合は側条施用剤やオリゼメート剤を散布しましょう。その後、必要に応じて本田葉いもち防除をしましょう。

紋枯病についても近年発病しているほ場が散見されますので紋枯病予防剤入りの箱処理剤を使用するか本田防除でモンカット剤を散布しましょう。

防除体系　図



No.7
農業技術情報
安心のネットワーク NOSAI仙北
平成27年12月発行
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課
JA秋田おばこ

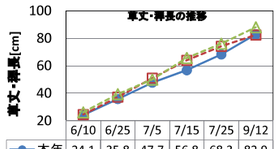
平成27年度 総括版

稲作生育概況　仙北地域振興局農業振興普及課水稲定点調査結果より

【育苗期】～雪消え早く、春先から高温～

本年は３月末に雪消えとなり、その後も好天が続いたことでほ場の乾きが良く、耕起作業の盛期は５月３日（平年５月７日）と早まりました。

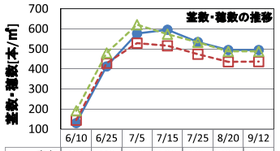
播種作業の盛期は４月23日（平年４月24日）でした。育苗期間（４月23日～５月23日）は平均気温15.1℃（平年差＋2.0℃）、降水量54.5㎜（平年比46％）、日照時間は238時間（同135％）でした（アメダス大曲）。育苗期前半の過度な高温による苗ヤケや籾枯細菌病、乾燥による葉先枯れ等が見られました。



	6/10	6/25	7/5	7/15	7/25	9/12
本年	24.1	35.8	47.7	56.8	68.3	82.9
平年	24.5	37.2	51	64	74.2	82.4
前年	26.1	39.4	50	65.7	76.1	88

【田植期】～活着、生育は良好～

田植え盛期は５月23日（平年５月24日）と平年並でした。移植後は気温も高く、苗の活着に良好な気象条件でした。しかし、この時期は風の強い日が多く、深水管理が続いた影響等により茎数は６月10日時点で131本／㎡（平年比90％）と少なく、強風による植え痛みも散見されました。７月以降は高温多照、気温の日較差が大きい日が続き、分げつは旺盛になりました。７月15日の定点調査結果に基づく栄養診断では、Ⅳ型（籾数やや多い）やⅤ－２型（生育過剰）に該当する地点が多い結果となりました。

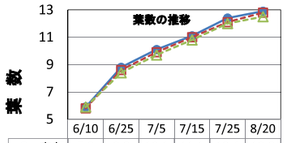


	6/10	6/25	7/5	7/15	7/25	8/20	9/12
本年	131	413	577	596	535	495	495
平年	145	429	529	516	474	436	437
前年	192	480	621	574	533	488	488

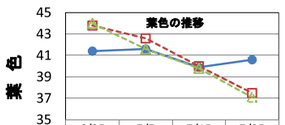
【出穂～刈取り期】～登熟後半に低温続くも、登熟はやや良～

出穂期は８月１日（平年８月４日）でした。出穂直後は高温・多照の日が続き、高温登熟が心配されましたが、８月中旬～９月中旬は低温で推移し、登熟は緩慢となりました。しかし、９月中旬からは天候も回復し、結果的に登熟はやや良好となりました。倒伏程度は平年よりすくない0.2（平年0.5）でした。

刈取り始期は９月22日（平年９月21日）となり、その後は一時的に雨の日もありましたが、刈り取り作業はほぼ順調に進み、盛期は平年並の９月30日（平年９月30日）となりました。



	6/10	6/25	7/5	7/15	7/25	8/20
本年	5.9	8.8	10.1	11.1	12.4	12.9
平年	5.8	8.6	9.9	11	12.1	12.8
前年	5.9	8.4	9.7	10.8	12	12.5



	6/25	7/5	7/15	7/25
本年	41.4	41.6	39.9	40.6
平年	43.8	42.6	40	37.5
前年	44	41.6	39.8	37.1

作柄概況

～県南地域の作況指数は「103」、収量は597kg／10ａ～

平成27年10月30日に東北農政局秋田地域センターが公表した資料によると、秋田県の米の収量は589kg／10ａで作況指数103、県南地域の収量は597kg／10ａで作況指数103となりました。

～総籾数は平年並、穂数が多い（定点調査ほ）～

水稲定点調査ほの玄米収量は609kg／10ａ（篩い目1.9㎜）で平年よりやや多い結果（平年比104％）となりました。収量構成要素（下表参照）は、㎡あたりの穂数は多く、１穂粒数は少なく、総籾数は平年並となりました。登熟歩合、千粒重はいずれも平年並みであり、結果的に10ａあたり玄米重は609kg／10ａとなっています。また、ＪＡ秋田おばこの12月９日現在の１等米比率は97.8％となっています。

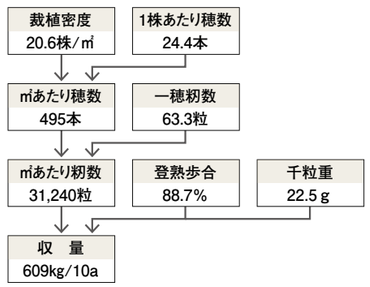


表　定点収量及び収量構成要素（あきたこまち、管内10地点）

	玄米重 kg／10ａ	穂　数 本／㎡	１穂籾数 粒／穂	総籾数 粒／㎡	登熟歩合 %	千粒重 ｇ／千粒
本　年	609	495	63.3	31,240	88.7	22.5
平年比（％±）	104%	113%	89%	101%	＋1.7	100%
前年比（％±）	103%	102%	91%	93%	＋10.7	98%

来年度へ向けて

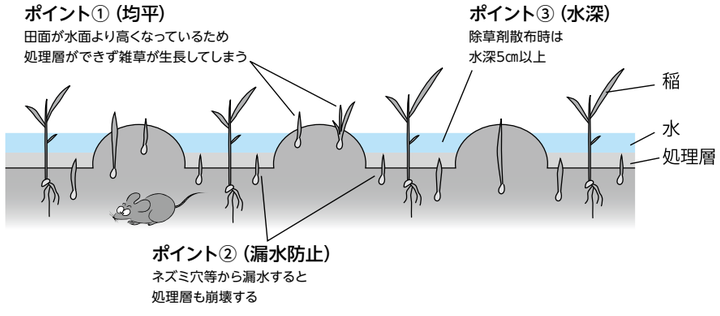
雑草防除の徹底と斑点米カメムシ対策

今年度、落等の主な原因は斑点米カメムシ類の被害による着色粒でした。アカスジカスミカメの発生が非常に多く登熟後半の加害も多く見られました。また、ほ場内に雑草が残っているところでは収量の減少と共に被害粒の発生が多く見られました。雑草をほ場に残してしまうと養分競合や斑点米カメムシ類のすみかとなり収量、品質ともに低下し結果として収入の減少につながってしまいます。来年度は斑点米カメムシ類対策と雑草防除をセットで考えていきましょう。

雑草防除のポイント　～まずは効かせる環境づくりから～

雑草防除は除草剤散布を基本としますが、まずは除草剤の効果が最大限発揮されるほ場を作りましょう。除草剤は散布後、水により拡散し、その後３～４日かけて田面に処理層を作り除草効果を発揮します。この間に田面が露出してしまうと処理層が作られず効果が発揮されません。雪解け時に雪が残っているところは高い場所ですので切り土しコンバインの旋回跡などの低い所に埋め戻しましょう。また、耕起、代かき作業は田面の凸凹を無くすように丁寧に行いましょう。

ほ場の水持ちを良くすることも重要です。代かきを荒代かき、植え代かきの２回かきをするなど丁寧に行い漏水しにくいほ場を作りましょう。また、畦畔のネズミ穴などから漏水する場合もあります。畦塗り機や畦マルチなどでしっかりと畦畔からの漏水を防ぎましょう。



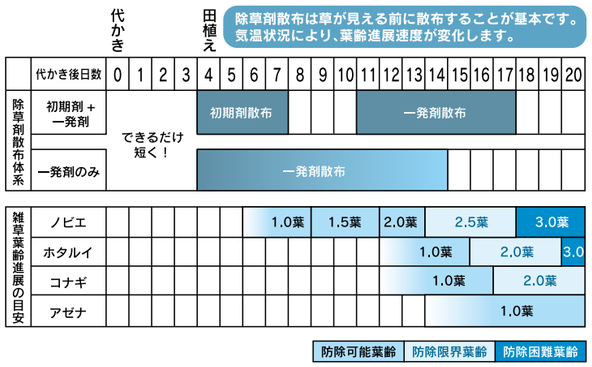
除草剤散布のポイント

近年は雑草の生育スピードも早まっており、長期間にわたり、ダラダラ発生をする雑草も増えていますので一発剤散布のみでは抑えきれなくなってきています。このため除草剤散布は初期剤と一発剤散布の体系処理を基本としましょう。

①雑草の種は代かき後から生育を開始します。近年は代かき後の気温が高い傾向にあり、ノビエは代かき後約７日で１葉に達します。一発剤を効果的に使用するためには代かきと田植えの間はなるべく短くし、初期剤は移植当日か翌日に散布しましょう。

②初期剤は一般的に７日～10日ほど雑草を抑える効果があります。一発剤散布は初期剤散布後一週間を目安に行います。効果を安定させるため、できる限り深水で散布をしましょう。一発剤散布後一週間は入水、落水を行わず、万が一、入水する場合は処理層をこわさぬようゆっくりと水を入れてください。水口に使用しない苗箱を置くなどして水の勢いを抑えるのも効果的です。

除草剤散布適期例と雑草葉齢進展の目安



ほ場に合った除草剤を選択しましょう

除草剤には雑草によって得意不得意があります。自分のほ場にある雑草をよく見極めて効果的な除草剤を選択しましょう。

草種別防除体系　例

雑草種類	初期剤	一発剤
ノビエ	メテオ ピラクロン ショキニー豆つぶ	シリウスエグザ、トップガンＧＴ、ウィナー、月光
ホタルイ		トップガンＧＴ、コメット、ウィナー、バッチリ
コナギ		コメット、バッチリ、シリウスエグザ
アゼナ		シリウスエグザ、トップガンＧＴ、アピロキリオＭＸ
オモダカ		コメット、月光、バッチリ

※一発剤は初期剤散布後７～10日後に散布しましょう

一発剤散布後に残草してしまった場合は中後期剤で追加防除を行いましょう

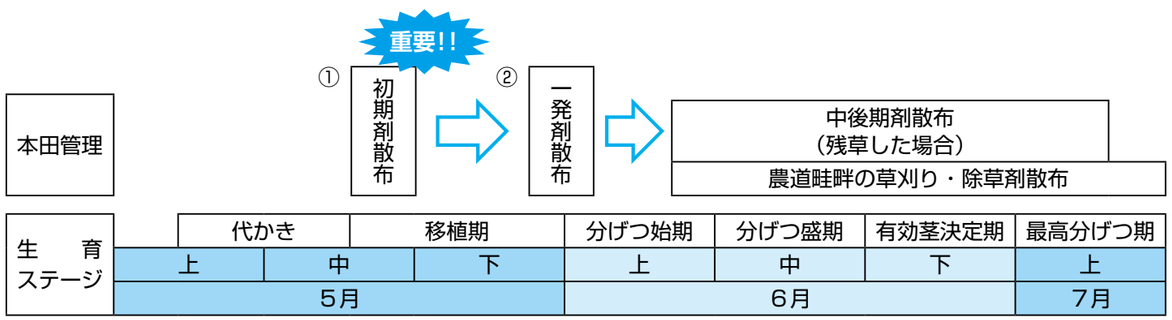
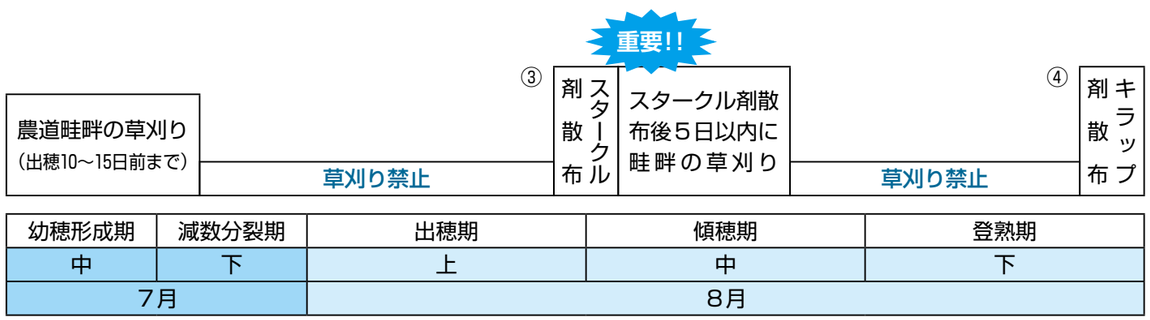
ヒエ剤	クリンチャー粒、ＥＷ	広葉剤	バサグラン粒、液剤
	ヒエクリーン粒、豆つぶ		
ヒエ・広葉混合剤	クリンチャーバスＭＥ、ヒエクリーンバサグラン粒 アトトリ粒、フォローアップ粒、ワイドアタックＳＣ		

畦畔の除草と薬剤防除でカメムシを徹底防除しましょう

斑点米カメムシ類は休耕田や農道、畦畔の雑草をすみかとしています。出穂10～15日前までに数回草刈りや畦畔除草剤の散布を行いすみかとなる雑草を無くすようにしましょう。

③薬剤防除では出穂期10日後頃にスタークル剤を散布します。この時、水田内だけではなく畦畔や農道にも散布するようにしましょう。ただし周辺に園芸作物がある場合はドリフトに十分注意してください。その後、薬剤散布後５日以内に農道や畦畔の草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖地を無くしましょう。その後は収穫２週間前までは草刈りは行いません。

④今年は登熟後半にアカスジカスミカメによる加害も目立ちました。発生量の多い年や水田内にノビエやホタルイ等が多く残草しているほ場や牧草地、休耕田が隣接しているほ場ではスタークル剤１回の散布だけではすべての被害を防ぐことはできませんので出穂24日後頃にキラップ剤を散布しましょう。

散布時期	薬剤名	希釈倍率／散布量（10ａあたり）	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期10日後頃	スタークル粉剤ＤＬ	３kg	収穫７日前まで	３回以内
	スタークル液剤	1,000倍／60～150ℓ		
出穂期24日後頃	キラップ粉剤ＤＬ	３～４kg	収穫14日前まで	２回以内
	キラップフロアブル	1,000～2,000倍／60～200ℓ		

斑点米カメムシ類は地域全体となって防除を行う必要があります。おばこ一斉草刈りデーや共同防除などで適期に管理や防除を行うように心がけましょう